

## 作業療法士の誕生までと、その後～

土 澤 健 一<sup>1)</sup>

「作業療法史」を辿り、「作業療法士」誕生までを解説する。さらに「作業療法学」の新たな展開にも触れ、最後に私見を添えて結びとしたい。

ヒポクラテス（BC460-337：ギリシャ）は患者に治療法として、作業を勧め、その人が回復する理由を自然の治癒力ととらえ、精神と身体との相互作用を重視したとされる。ガレノス（AD130-201：ギリシャ）の「仕事をするとすることは、自然の最も優れた医師であり、それは人間の幸福について不可欠なもの」という主張は、作業療法の起源を示す言葉として知られている。

実学にも諸定義あるが、私は先輩教師の言説を参考にして、次の様に考えている。「実践」「組織」「教育」「研究」この四つが構成する輪が実学の実体であり、時間を軸にしてその輪が螺旋状に進展する様が、実学発展の一般形式であると。私の属する作業療法学も実学として発展して来た。まずは社会の必要に応じて実践がなされたであろう。起源を前述のガレノスに求めるまでもなく、極めて原始的な集落社会が成立した時期において、既に病気に臥した仲間が仕事に復帰することで喜びを回復する現象は認知されていたはずである。もっとも、職業としての作業療法士の成立は1910年代のアメリカを待つことになるが、1952年には「世界作業療法士連盟」という国際組織が誕生し、現在の正式加盟国は七十カ国を超えている。日本においても1960年代に専門職制度が成立し、以後、全国レベル及び大小地方レベルの職能団体が成立し、実践経験の共有化が始まり、1975年には世界連盟に正式加入した。ほぼ時期を同じくして経験知の伝承のため教育が開始された。日本では、1963年に最初の専門学校が誕生してから今日に至るまで増え続けている。私が学んだ30年前は全国に10校程度であったものが、現在では170校を超え、大学の専攻も50を超えた。1998年には我が国においても、作業療法学の博士課程が設置された。教育に次いで、学会が開催され学術誌が発行されるようになり、今日では都道府県レベルで学会が成立し、専門分化も進んでいる。まさに、実学発展の一般形式が踏襲されてきた。私の職業人としての同一性の一部もその螺旋の隅に存在するという心象である。

ヒポクラテスやガレノスの時代における前・作業療法的実践の対象は精神（心）を病んだ人々であった。それは、長い中世を経てルネサンス期に至り作業療法的外形が整った以後もほぼ同様である。転機は第一次及び二次の世界大戦にあると言われている。大戦後、街には傷痍軍人が溢れることになり、戦後のアメリカにおいて、彼らを社会へ復帰させるための合言葉としてリハビリテーションという概念が採用されることになった。その際、治療媒体として工芸など手作業を使うことの多かった作業療法士に上肢機能の回復訓練が期待され、理学療法士には下肢機能の回復訓練が期待されることとなり、ルーツの違う作業療法とリハビリテーションが関連付けられることとなった。今日、一般の人々が作業療法士を「リハビリで手を見てくれる先生」と認知する契機となったのである。前後して、先天性疾患の患児等を対象とする分野が派生する。さらに、高齢化に伴う諸問題を中心課題とする分野が形成された。つまり、作業療法学は徐々に精神機能作業療法学、身体機能作業療法学、小児期作業療法学、老年期作業療法学と専門分化し、最近はこれに在宅など医療施設外で実践される地域作業療法学という分野を加えて、五領域構成となった。専門分化はさらに進むと想定される。それと同時に、どの様に専門分化が進んでも、作業療法学として統一性を維持していくための中心テーマである「作業」そのものを探求しようという研究者グループが形成され、やがて「作業科学」という基礎的研究分野を確立した。私見ながら、これは既に、作業療法士集団による実践を基盤とした実学としての作業療法学の枠組みを超えて、哲学的色彩を帯びて行くのだろうと思われる。

1979年にアメリカ作業療法協会代表者会議で採択された『作業療法の哲学的基礎』では、次のように書かれている。「人間は目的のある活動を行うことで発達が促される活動的生き物である。本来備わっている動機付けを行う能力を発揮し、目的のある活動を通して、人間は自己の肉体的・精神的健康及び社会的・物理的環境に影響を与えることができる。…（中略）…作業療法は、対人関係や環境的構成要素を含む目的のある作業が、障害を

1) 弘前医療福祉大学保健学部医療技術学科

予防したり治療したり、最大限の適応能力を引き出すために利用できるという信念に基づいている。」つまり、ガレノス以来、作業療法は『信念』の上に成立していることになる。さて、近年、新しい方向性を示す基礎モデルとして注目されているのが、「川（KAWA）モデル」である。川モデルの日本版HPを見ると冒頭に次のように簡単な説明が記載されている。「川モデルとは、対象者自身とその人のおかれている状況を、流れる川のイメージで喩えて、それぞれの情報間のつながりを分類し、描き手が対象者の人生を表現し、考察する作業療法モデルです。」ここに、信念を基盤とした論理構成は無いように思われる。さて、川モデルの歴史を私の知る範囲で概説すると、歴史と言うほどでもないかもしれないが、十数年前、西日本の作業療法士たち数名が立ち上げた勉強会で、直接聞いたわけではないのだが、美空ひばりの演歌にヒントを得て、4年に1度開催される作業療法の世界学会で披露したところ、欧米の臨床家達からおおいに喝采を得たようである。中でも、日系カナダ人でトロント大学の作業療法学科教授のイワマ博士が熱心な支持者として、普及に尽力してきた。彼は後にGeorgia Health Sciences University - College of Allied Health Sciences 作業療法学科の主任教授として米国へ移籍した。彼の努力と同時に、川モデルの旗手を受け入れるアメリカの懐の大きさに感動する。彼には米国やヨーロッパの学会で頻りに講演依頼が舞い込んでいるようである。このように当該モデルの存在感が増すにつれて、比例するように風当たりも強くなるのが世の常で、その例にもれないようだ。が、私は蔭ながら応援している。さて、本家本元であったはずの日本においては、事情は様々あるようだが、いっこうに日の目を見ない。私はこのモデルの存在を知った当初、作業療法さらにはリハビリテーションの新しい地平を拓きうると予感した。

イワマが提唱する川モデルの特徴は、クライアントの人生を川の流に喩え、作業遂行の問題を川とそれを構成する事物のメタファーによって表現することである。このユニークな評価ツールを支える人間観は、西洋的な自己とは異なる日本文化に固有の自己、則ち、環境とのはっきりとした境目がなく、総体的な自然の一部として存在する自己である。まず、イワマによれば、作業療法の理論モデルの主流である人間作業モデルとカナダ作業遂行モデルは、環境から独立した自己を想定する西洋的人間観に導かれており、必ずしも日本や他の文化圏でのリハビリテーションにふさわしくない。事実、人間作

業モデルでは、自己は、環境を支配的に制御する開放システムとして描かれ、カナダ作業遂行モデルでは、自立した個人を単位として理解されている。しかし、これでは、自然と自己を一体化し、社会的な間柄に人格の基礎を置く日本的な自己のあり方と齟齬をきたしてしまう。そこでイワマは、日本的な自己をより適切に表す理論モデルとして、川の自然的なメタファーを提唱する。具体的には、川のメタファーの構成要素は、「生命の活力」や「生命の流れ」を表す水、クライアントの環境を表す川の側壁や川底、生命の流れを妨げる障害としての岩、価値観や性格に特技や出身地などクライアントの個人的属性を表す流木、そして、妨げられてなおクライアントの生命の活力が流れられる隙間である。こうして、自然のメタファーで自己を解釈して、自然・社会・神性と密接に結びついた日本的な人間観を適切に表現することが目指される。実際の面接では、クライアントに自分の状況を表す川の絵を描いてもらうか、人間関係に応じて療法士自身がクライアントの為に川を描くことにより、クライアントの問題を評価する。

川モデルの利点は、言語による直接的な自己観察が困難であり、それを促されることに抵抗するクライアントの問題を評価するのに好便なことである。また、視覚的モデルで問題を表現するので、家族セッションなどで問題を理解するための基盤としても有効である。更に、自由に川を表現してよいので、クライアントに応じて、簡単にも精密にもできる融通性がある。

若い頃、人生とは様々なものを蓄えていく過程だと漠然と思っていた。人生も半ばを大きく超えてみると、このごろは、人は生まれた時に「私」という全てを授けられた、あるいは借りたのであって、それを少しずつお返ししながら、全てを返済して何処か（何か）に戻るのかなと思うことがある。動植物の生涯という「川」は、おそらく元々ただ流れていたのだろうが、「智恵の実」を食し、自分が自分であるという自覚を得ることによって「道」を拓く文明が開化したのであろう。人類が人類となった時に楽園を出てしまったのであれば、生きているうちに川一元の（あるいは無元の）世界に戻ることはできない。選べるのは、「川」と「道」のバランスのとり方だけだと思う。登ってはいけない山の頂まで道を拓き、「生命の実」まで食したら、戻るべき楽園を永遠に失うに違いない。複雑な時代に生きる我々にとって、「作業」との接点を保ち続けることは、バランス維持装置を装着するようなものではないだろうか。